

2. マイコプラズマ乳房炎 (Mycoplasma Mastitis)

今、全道（十勝・北見・釧路）ならびに管内で、マイコプラズマ性乳房炎の発生報告が続いています。昨年11月のアメリカ研修でも、マイコプラズマ乳房炎の講習を受け、様々な問題があることが分かりました。今回はまず、マイコプラズマの乳房炎がどのようなものなのかその乳房炎を認識することから始めたいと思います。

マイコプラズマ乳房炎は、3大伝染性乳房炎の一つに数えられ、現在、アメリカで最も警戒されている乳房炎です。3大伝染性乳房炎とは、黄色ブドウ球菌乳房炎、無乳性レンサ球菌乳房炎、そして、マイコプラズマ乳房炎の3つを指し、3 Major Pathogens（3つのメジャーな病原菌）すなわち、「MP3」と呼ばれます。伝染性が非常に強く短期間に大きな被害をもたらすため（爆発的な発生）、非常に警戒しなければならない乳房炎です。その被害は、たった1度の爆発的な発生（Explosive Outbreak）だけでも、スカイロケット（Skyrocket）のようだと、Dr.Allan Britten は述べています。

マイコプラズマ

1) 菌の特徴

マイコプラズマは、非常に小さい微生物で、大腸菌のおよそ10分の1程度の大きさしかありません。また、細胞壁を有していないため、細胞壁形成を阻害することによって効力を発揮する抗生物質（ペニシリンなど）は、まったく効きません。培養には、特殊な培地と炭酸ガスや湿度が必要で、一般的な培養検査では見つけることができません。また、その培養自体に時間がかかることもその発見を難しくしています。

2) 乳房炎の症状

感染し、発症した乳汁の状態もいろいろのようです。色がこげ茶っぽくなるもの、あるいは繊維状、顆粒状、砂状のブツ(clot)を伴う粘りのある乳汁などです。Dr.Allan Brittenによると、最も典型的な症状は、4分房が感染し（伝染性が強く速い）それらが完全に泌乳ストップしてしまうものと言いますがそうした完全な症状を出すものは全体の20%以下だそうです。大腸菌のように乳房が腫大することも少ないようです。

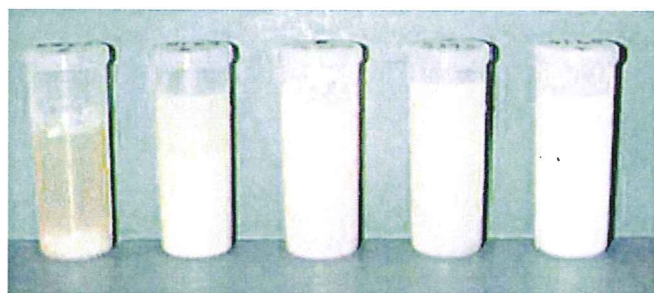
実際の現場では、慢性・潜在性のようなマイルドな乳房炎の状態（牛によって

はまったく無症状) によってひそかに忍び寄ってその感染を広げるケースも多いとのこと。また、前述したように抗生物質に反応しない乳房炎は要注意となります。

一般培養では成長しないためバルクタンクの生菌数リポートから推測することはできませんし、マイルドなケースでのバルクタンク体細胞数もほとんど変化しないのでそれらのモニターは、この場合意味のないものになります。

したがって、基本的には専用の培養検査でしか、確定することはできません。

(つづきます)



*今回のマネージメント情報で佐竹獣医師がライナーの洗浄について記述しています。極めて重要かつ有効な情報ですので、是非しっかりと読んでください。1970年代にバックフラッシュという技術(搾乳終了ごとにクローとライナー内を自動洗浄するシステム)が普及しましたが、機械の問題やライナーリップなどの指摘、さらにはコスト面の問題などから廃れていました。しかし、近年のMP3の問題などから、今非常に見直されつつある技術で、前述のDr.Allen Brittenは、この方法はこうしたMP3だけでなく大腸菌性乳房炎、環境性乳房炎に間違いなく有効であろうと述べています。

今後この考えが再び大きく普及する可能性のあるもので、大きな設備投資をしなくても、パーラー内のホースを利用する(マニュアルバックフラッシュ)ことによって大きな効果を得られる可能性があります。これについては、このマイコプラズマ乳房炎の後半でもう少し詳しく説明しますが、今回のS獣医のM情報の意味をよく理解してほしいとおもいます。

私自身は、この方法が「乳房炎対策の福音」となるように思えてなりません。

黒 崎